

◆ 「語ること」の重み ◆

「どうぞこのくまのめんどろをみてやってください。おたのみします」

童話『くまのパディントン』（マイケル・ボンド作 松岡享子訳 福音館書店）の一節である。

先月25日に亡くなられた翻訳者の松岡享子さんは、「長い作品でも必ず訳文を音読し、録音を聞いて確かめた」とのこと。

このコロナ禍の中、「学びの保障」としてのオンライン学習への対応は大きく進展した。このメッセージでも触れてきたけれども、本校においても学校行事の様々な側面でICTを駆使した取組を進め、また各教科での動画配信も数多く実施してきた。

しかしながら、である。やはり、何かが足りない。双方向のオンラインについては、かなりのことができるようになった。先生方の工夫で、子どもたちの質問にも適切に対応できるようになった。だが、例えば、廊下での何気ない会話等で子どもがふと見せる、ちょっとしたしぐさへのこちらの感受性のアンテナはかなり限定されたものになってしまう。

松岡さんは、「語りの際は、部屋を暗くし、ろうそくに灯をともしたそう。子どもは何が始まるのかとわくわくするが、「もう、ずいぶん前から「子どもの反応が弱くなった」と案じていた」とのこと。「原因は、大人が発する言葉の軽さにあるのではないか」と続く。

オンライン学習ではどうしても伝わらない側面がある。「ぬくもり」や「体温」そして「機微」・・・。

同日の「声」の欄に、「コーヒーに合掌 心洗われる姿」とのタイトルで、僧侶の方の投稿が掲載されている。立ち寄った喫茶店で、運ばれてきたコーヒーを前にした女子高校生の所作。「彼女は、まるで仏像を前にしたかのようにうやうやしく手を合わせ、軽く会釈した」とのこと。同じような光景を目にしたことがある。こういった景色の本質も、オンラインではなかなか把握することができないのでは、と感じている。

この度のコロナウィルス感染症。どうしてもその弊害ばかりが目につくけれども、「語ること」の重みについて、改めて考える契機となっている。



（参考、引用：令和4年2月6日付 朝日新聞 1面「天声人語」、8面「声」）